2022年12月18日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

クリスマスは終わらない

［ルカによる福音書1章39～50節］

そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」そこで、マリアは言った。

「わたしの魂は主をあがめ、 わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

身分の低い、この主のはしためにも 目を留めてくださったからです。

今から後、いつの世の人も わたしを幸いな者と言うでしょう、

力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、

その憐れみは代々に限りなく、 主を畏れる者に及びます。」

 [１] いのちを宿した二人の女性のやりとり

「クリスマスは終わらない」というタイトルは変だなあと思う方もおられると思います。でも、こう言い替えたらその通りだと思って下さるのではないかと思います。―「いのちは終わらない」。

　「クリスマス」というのは、イエスという人が2千年前に生まれた出来事ではありますが、それは「過去」の物語ではありません。歴史的な出来事でありますが、これは永遠に古くならない出来事なのです。

主イエスの母となったマリアが、自分の親類であるエリサベトに山里に会いに行き、マリアが挨拶をすると、エリサベトのお腹に与えられていた子（ヨハネ）がその胎内で喜び踊った、という記事が先ほど読まれた箇所にありました。その時のエリザベトの言葉も印象的です。42節から。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」そうです、この二人の女性には共通していることがありました。それが「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた」ことでした。彼女たちは、今妊娠しています。二人とも、人間の力を超えた不思議な神様の方法によってその胎の中にいのちを宿しています。予期しなかったことであり、考えてみると大変困る、受け止めきれない話です。この二人だって、生身持つ人間、戸惑ったり、神様は一体私に何をされるのかと思ったに違いないと思います。しかし、例えばマリアは、その神様からのお告げに対し「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように」（1:38）と受け止めました。そして今日のこの場面、二人の会話を見てみると、いのちの喜びに満ちているたくましさ、そしてユーモアさえも感じます。そしてお腹の中の子供も、それに呼応しているように喜び踊っているのです！もうじきマリアから救い主イエスが生まれる。そしてそこに、いのちそのものの祝福の出来事が起こっていて、ああ、これがクリスマスということの大きな意味なのだなと思いました。

クラウス・ヘンマーレというドイツのアーレン地区の司教だった人がこんな言葉を残しています。

***人間になるとは、幼子になること アダムとエワ以来、例外はない。***

***人間の道は、幼子を経由する。***

***それは神ご自身の道。***

***神の子は人となりたもうた、幼子となることによって。***

***幼子になる者だけが、神の国に入ることができる。***

***単純になること、純粋になること、***

***ともに苦しむことができること、***

***ともに喜ぶことができること。***

***自らを与え、与え尽くすこと。***

***幼子、それは諦めと打算に対抗する力。***

これは、とても深い言葉だなと思います。「人間になるとは、幼子になること アダムとエワ以来、例外はない。」と。「アダム」というのは「土から生まれた人」という意味です。「エワ」というのは「いのち」という意味です。女の人はエワ・いのち。一つには女性だけが新しいいのちを宿す、という意味もあるのでしょう。

「いのち」というのは、目には見えませんよね。いのちの始まりは誰にも分りません。そして人のいのちは、肉体を与えられて幼子から始まります。弱い弱い存在、しかし、そこに最も近い存在の愛情と語りかけによって成長してゆきます。私たちは皆、完全な他者依存の時代、他者のギフトの中を通ってでなければ愛や優しさを知らないまま大きくなってしまうかもしれません。イエス・キリストも、神の子でありましたが、人間と全く同じになられたのです。ですからヘンマーレは言っています。「人間の道は、幼子を経由する。それは神ご自身の道。　神の子は人となりたもうた、幼子となることによって。　幼子になる者だけが、神の国に入ることができる。 単純になること、純粋になること、　ともに苦しむことができること、　ともに喜ぶことができること。自らを与え、与え尽くすこと。」と。

私たちは皆「ギフト」に囲まれて生きています。生かされています。冷静に考えてみたらそうでしょう。この地球、この水、この空気、この光、この野菜、動物、そして誰かの優しさや愛です。私たちは「受ける」ことによって生きています。そして聖書は言うのです。あなたが生き辛さを覚えているのなら、幼子のようになりなさい、自分で頑張るのではなくて、神様の愛に委ねればよい。たとい人にどんなことを言われようが、或いは自分のことをどんなに辛く思っていようが、あなたのいのちは神様によって創造され、生かされ、担われている。そのあなたと共に生きるためにイエスは幼子となったのだということを信じて欲しいと、聖書は告げているのです。神様の前に幼子となることによって、明け渡すことによって、私たちは人生の「諦め」や、逆に自分のプランに縛られている「打算」から自由にしてくれるんです。

[2] さあ、前に進もう。

「音楽」と「人生」は似ていると思います。あるドラマで、4人のアマチュアの演奏家がいて、その中の一人の女性が仲間を裏切ってしまうようなことになったのです。もう私はあなたたちの仲間ではいられないというようなことを言うのですが、その時に他の女性がこう言うのです。「過去とか、そういうのなくても、音楽やれたし、道で演奏したら楽しかったでしょ。真紀さんは奏者でしょ。音楽は戻らないよ。前に進むだけ。いっしょ。心が動いたら前に進む。好きになった時、人って、過去から目に進む」。『カルテット』という少し前のドラマですが、この「音楽は戻らないよ。前に進むだけ」というのは本当ですね。私たちの人生も音楽なのです、きっと。いのちが始まった時から音楽は続いている。この世界が始まって以来、音楽が消えたことは一瞬もないと思います。五線譜がなくても、風の音。雨の音。鳥の声。さざ波、そして心臓の鼓動も。音楽はもとに戻らない。前に進む。私たちの人生も弱さや失敗や罪もある人生ですが、音楽のように前に進むのです。いや、神様の赦しと愛の中で前に進ませて下さるのです！このマリアの賛歌は、新約聖書の讃美歌第1号だとも言われます。「わたしの魂は主をあがめ、 わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。…力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」

マリアはお腹の中のイエスを讃えています。自分を愛し、支えるいのちがここにある。マリアは神様から勇気を与えられました。「前に進むしかない！」。そして、神によるいのちの祝福は、これから代々に続くのだ。これがマリアの賛歌です。

熊坂さんもまた、信仰を持って演奏されているプロのプレイヤーです。あとで演奏して下さる「悲しみ」という曲は、ご自身の悲しみの体験から作曲されたものだそうですが、きっと皆様、この中に熊坂さんの祈りを感じ、そこで生まれて来る音楽に不思議な深い慰めを感じられると思います。

クリスマス。これは「過去」のお話ではないのです。今私たちにささやきかけている幼子イエスの声に耳を澄ませたいと思います。お祈り致します。

神様、私たちにいのちを与え、またそれを祝福して下さっていることを感謝致します。クリスマス、それは、私たちのいのちをあなたがどこまでも愛して下さっていることの明確なしるしです。この年もそれぞれ様々なことがあったと思います。しかし私たちは、あなたの愛の中で赦されながら、励まされながら、また、誰かの助けも頂きながら前に向かい、新しい年を迎えて行きたいと思います。

主よ、どうぞ、私たちと共に歩んで下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。